

新しい時代 新文化運動と哲学

現世人間の起源と未来

2、本来、人間の心靈と神体

“すべての悲しみと痛みを脱したあと永遠に喜ばれん…….”이라는歌のような心靈、これは人間の言葉では表現できない元來人間の心身状態から生み出す喜びであろう。この喜びは罪深い属している人間世界の喜びではない。この喜びは、六千年間の人間の喜びや嬉しさ、喜悅をひとまとめにして、この喜び嬉しさに比べたとしても数億千万分の一にもならないのである。

この喜びは神の喜びであり、神の嬉しさである。だから一旦、この喜びを味わった者は神を離れることが出来なく、一秒たりとも神を逃すことができない。あまりにも嬉しく、あまりにも幸福で、あまりにも満足なので、一般の人たちには想像すらできない驚くべき嬉しさと喜悅であるのである。

元來、人間は神であった。また、人間は今日のように制約され不便な存在ではなかった。無限の時間と無限の空間を享有しながら、喜悅に満ちた世界で生きてきたのだ。元來、人間はその心の限界がなかったし、限界がなかったので宇宙の凡てを見ることができたのだ。当時の人間は、今日のように制約されて不便な身体ではなかったし、完全な自由自在の権能を持っていたのだ。

人間は誰でも、その喜悅に満ちた世界に対する記憶を心の奥深くもっているのだ。そのような無限に幸福であった記憶があるので人間は本来の幸福であった喜悅の世界に帰ることを望んでいる。だから、人間は幸福を追求するのだ。無限な喜びと栄光の中で幸福に暮らした神の血が人間の中に流れてるので、我々人類は幸福を憧憬し、幸福に満たされた楽園を探して、六千年間を迷ってきたのである。元々人間は神であった。こ

の故に、人間は神を追求したのだ。また、その神は生命の神である。だから、人間の心の中では生命を大切にし、死にたくない本能があるのだ。

宗教(Religionとは、語源的には神と再結合を意味する)これは、人間の起源である神の世界に帰らんとする最も本能的な表現から作られたものである。

人間は誰も幸福を追求する。それは、人間がいつしか無限な喜びで暮らした経験があるからである。そのような幸福の経験がなかったとすれば、われわれは幸福というものに対し全く無感覚に行動するはずである。例えば、ある蒸し暑い夏の日としよう。暑さを凌ぐ良い方法はないかと考えているとき、だれかが冷たいスイカを食べようと言ったとしよう。スイカを食べたことのある人なら、その冷たく甘いスイカの味を思い浮かべることができる。だが、遠いエスキモーの国から来て、スイカが何かを知らない人がいたとすれば、かれはスイカの冷たい味を思い浮かべることはいはないはずだ。このように、全く経験のないことはその味をわかることができず、それを追求することもできないはずだ。

だが、人間は永遠の幸福を追求する。それは、いつか遠い昔に人間が無限の幸福の中で永久に暮らした経験があるということを立てしているのである。

人間には神であった本来の品性(心情)が血の中に遺伝され現在にも残っている。神は本来、永遠に生きる生命力をもつ神であったから死ぬことをきらい、また、神は無限の創造能力があったので今日、人間が飛行機を造り、ロケットを打ち上げる創造力を発揮したのである。

見よ！ 暑さを避ける扇風機は誰が造っ

たのか？ マイクは誰が造ったのか？ テレビジョンは誰が造ったのか？ 神が地に降りて創造したのか？ 否！これらは全部、人間たちが創造したものである。人間の中に創造の神が内在しているから、皆さんにも創造力があるのだ。いまこの瞬間にも人間たちは絶えず何かを創造しているのだ。創造するということは驚くべき能力である。人間がこのように凡ゆるものを創造していることは、人間の中に創造主、神の血があるからである。そのような幸福の経験がなかつたから知らないものがなかった。すべてを一目瞭然にわかることができたし、だから、時空を超越して速るものがなかったのである。ひとつに結合するその心は、“神の心”であった。その心はいつも変わらぬ同一の心であって、現在の人間のような周囲の環境によって朝夕変わるような心ではなかった。

元來、人間には心の限界がなかった。心に限界がなかったから知らないものがなかった。すべてを一目瞭然にわかることができたし、だから、時空を超越して速るものがなかったのである。ひとつに結合するその心は、“神の心”であった。その心はいつも変わらぬ同一の心であって、現在の人間のような周囲の環境によって朝夕変わるような心ではなかった。本来、人間はほかでもない神であった。神の善意が充満していたのだ。ところが、いまから六千年前、神の霊が悪魔に占領され捕虜になったので、神の存在が人間の身体に化けてしまった以後から人間の心中には悪心が侵入し占領したのである。悪心は利己的な霊であり、特権意識の霊であり、暗黒の霊であり、分裂と嫉妬の霊である。

このような悪霊が人間を支配しているので、本来、人間の主体霊であった神の霊(良心の霊)は、悪魔の靈獄に閉じ込められ後天的な悪魔の靈(利己的な靈)が良心を馬に乗ったごとく支配しているのが今日の人間

の衰れな姿である。人間の心はどうしても良心的に動くことができず慾心に従って瞬間、瞬間、利己的な考えを行動に移すことになったのである。これが今日、現在の人間の切ない現実であるのだ。

人間は誰でも善意に従って良心的に生きようとするのだが、人間の心はやむを得ず慾心に従って瞬間、瞬間、利己的に動くようになっている。“己れ”という自我意識が正に悪魔の靈に占領されているその証しである。

3、生命の神と死亡の神

本来、神は永遠な生命の神であり、善なる神であったが、悪魔の靈に占領されることに困り、悪心が入るようになって死ぬしかない人間に転落することになったのである。それでは、生命の神とは、また、死亡の神とは具体的にどういうことを言うのか？

生命の神とは、生命を吹き入れてくれる心であり、それは、善なる心、良心である。世の中に良心のない人はいない。いかに悪く罪の多い人でも心には一抹の良心は残っている。良心は罪を犯そうとするとき、その罪を指摘する。善行のときには心から喜んで

いる。良心は心の中で行われる総てを知っており、常にその良否も感じている。

だが、その純粋な良心を持続している人は少ない。良心よりも“我”という意識が遥かに大きくその心を支配しているからである。己れ、“自我”という意識が大きくなるにつれて良心の霊はだんだん崩れ、その力をなくしてしまう。

人間は誰でも良心的に生きようと努力するが、どうしてもなく自己の慾心の赴くままに引きずられるのは“我”という慾心の仮の霊が人間の心の主導権を握っているか

らである。

良心に基づいて行動するとき、人の心は堂々として平和である。その中からは生命力があふれるのである。だが、しからぬ心、慾心でいっぱい

の心は堂々とせず生命力も減少してくる。その心は何かを隠さねばならず、平和にもなれず絶えずビクビクして、自ら苦しいだけでなく他人にまで迷惑をかけるのである。その心は“自我”という意識に属し、また、死亡に属する心であるから、いつも骨が折れ苦痛を伴う心情でいるのだ。それに引き換え、良心に属しているときは、たとえその身が孤独であっても、心はいった

り平和であり、生命力が溢れてくる。人間だけが神であるのではない。この世の万物は本質的にみな神である。生きている生命だけでなく、鉄や岩のごとき無生物までも、その中には生命の神が内在している。だが、その生命の神を後天的な死亡の神

が取り巻いているので、死亡は生命をみ続けており、そのため、この世の万物は腐ってゆき死ぬしかなかったのである。人間が人間の生命力を思いっきり発現せずに挫折することと、世の万物が永遠無窮に光を発せず腐っていくことは、同じ理由からである。それは、死亡の神が生命神

より優位に立って万物を支配しているからである。それで、人々は老い、病になって死んでいくのである。時が経つにしたがって人の血は腐ってゆくし、その心も腐り、樹木や、鉄も時が経つにしたがい錆がついて消滅していく。このように、死亡の神に取り巻かれて腐り死んでゆく万物の中から、生命の神が再び死に打ち勝ち、人間と万物に生命を復活させること、これが即ち、生命を生かす`永生学`の核心であり、目標なのである。

元來、人間ほど高尚で美しく善なる高次元の存在はないのだが……

4、悪魔の虜になった神

生命の神は悪魔に占領され、捕虜になった状態で死んでゆくしかなかった。それは今日の人間の現実の姿でもある。だから、人間は生きている反面、死んでゆく人生の道を生きているのである。元來、人間ほど高尚で、美しく、善なる存在はなかったが、悪魔の靈獄に閉じ込められて以後、人間ほど弱く、無知で、幼稚な存在は、またとないのである。

人間は一秒先も見通せない無知な存在である。だから、自分が一分後に車にひかれて死ぬということを知らない。万一、未来を見通す眼力が人間にあったら、一分前に死ぬ場所を避けて生きることができるはずだ。だが、人間は暗黒の霊である悪魔が入っているので、その悪魔の霊が一秒先も見えないように眼前を遮断しているのである。

暗黒の靈は遮断の霊である。まるで紙で眼前を遮り裏面を見えないようにすることが、暗黒の靈なのである。暗黒の靈は無知の霊である。

考えてもみよ、この世の人たちがいかに無知な熊のような存在であるかを……。もし、異星人が今日の地球の状態を見たら、なんと嘆かわしいことと思うに違いない。

この地球上に住む人たちはみな一つの血であり、同じ血統の兄弟であるのに、赤と白とかに分裂し、無慈悲で恐ろしい武器を開発して、いつか失敗して爆発するやも知れぬ核武器を積み上げているのである。戦争を起こしお互いを殺傷するかと思えば、倉庫一杯に穀物を蓄えておきながら、また、ある一方では数十万人と一緒に餓死しているのを座ってみているだけ、という状況を異星人が眺めたらさぞかし嘆き悲しむことだろう。*

次の号に引き続き掲載
Subaru Kan / 新人類文化研究所長

격암유록 新 해설

제115회

未中運 말중운

六角千山鳥飛絶 륙각천산조비절에
八人萬運人跡滅 팔인만경인적멸을
嗟呼萬山一男 차호만산일남이요
哀哉千山九女 애재천산구녀로다
小頭無足飛火落 소두무족비화락에
千祖一孫極悲運 천조일손극비운을
怪氣陰毒重病死 괴기음독중병사로
哭聲相接末世 곡성상접말세로다
無名急疾天降災 무명급질천강재에
水昇火降 수승화강모르오니
積尸如山毒疾死 적시여산독질사로
填於溝壑無道理 전이구학무도리에
努鼓喊聲混沌中 노고함성혼돈중에
修道者 수도자도할일없서
五運六氣虛事 오운육기허사되니
平生修道所望 평생수도소망없네

천산(千山)에는 하늘을 나는 새가 끊기고 천화(天火)가 길이란 길 모두에 떨어지고 인적이 없어지니 아! 슬프도다. 만산(萬山)에 남자 하나요 천산(千山)에 여자 아홉이로다. 소두무족(小頭無足=鬼) 즉 하늘에서 불이 날아와 땅에 떨어지면 천조일손(千祖一孫)의 비극적 운을 맞게 되고 음기와 괴이한 독으로 중병에 걸려 죽게 되어 온 천지에 통곡하는 소리라 가히 말세로다.

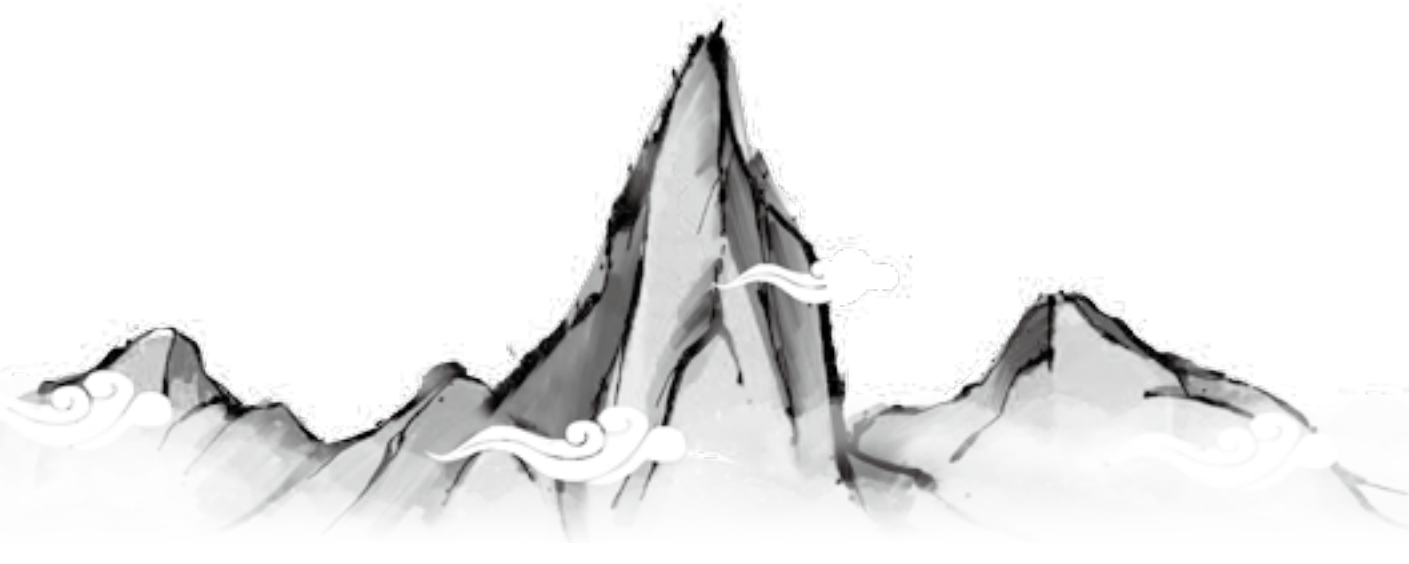
이름 모를 급성 과질이 하늘이 내리는 재앙임에도 수승화강(水昇火降)의 이치

를 모르니 음독과 과질로 죽은 시체가 산더미 같이 쌓이고 도랑과 골짜기를 매우지만 어찌해볼 도리가 없도다. 애크 쓰고 기를 쓰고 함성을 지르며 혼돈스러운 가운데 수도자도 어떻게 해 볼 수가 없어 오운육기로 치료한다는 것도 다 허사요. 평생을 두고 수도한다고 하였으나 소망이 없어지네. 수승화강이란 수기운이 올라가고 불기운이 내려온다는 것인바 일반적으로는 불은 아래로 흐르고 불을 위로 올라가는 것과 반대되는 것이다. 이와 같이 나라는 자리에 마귀가 앉아서 내리는 의식이 되어 나를 주장하므로 내(마귀)가 하고자 하는 것과 반대로 행하면(반대생활) 정도령의 감도해인이 털구멍으로 몸속에 들어와서 수승화강이 이루어지며 내(마귀)를 점점 죽여 나가게 되는 것이다.

水昇火降不覺者수승화강불각자는
修道者 수도자기니로세
多謫眞經念佛 다송진경념불허며
水昇火降 수승화강알아보소
無所不通水昇火降 무소불통수승화강
兵凶疾 병흉질에 다통통하니
石井巖 석정의를모르므로
靈泉水 영천수를 不尋 불심이요
心泉巖溪 심천고계모르므로
地上巖溪 지상고계찾단말가

수승화강을 모르는 자는 수도자라고 할

무명급질(無名急疾)이 오면 시체가 산처럼 쌓이는데 수승화강(水昇火降)을 모르면 수도자도 소용없느니라



수 없고 진경을 많이 외우고 정도령(미륵불)을 초초(秒秒)로 바라보고 고도(高度)로 사모하며 수승화강을 알아보시오. 수승화강은 통하지 않는 데가 없으니 병란(兵亂)과 흉한 질병(疾病)에도 다 통하느니라. 석정의(石井埵)를 모르므로 영천수(靈泉水)를 찾을 수 없음이요. 마음에서 솟아나는 생명수 샘의 시냇물을 돌아보는 것을 모르고 지상의 시냇물만 찾는단 말인가?

水昇火降不覺 수승화강불각하니
石井埵 석정곤을엇지알며
石井巖 석정의를 不覺 불각하니
寺聳七斗 사담칠두엇지알며
寺聳七斗不覺 사담칠두불각하니
一馬上下 일마상하엇지알며
馬上下路不覺 마상하로불각하니
弓弓乙乙 궁궁을을엇지알며

弓弓乙乙不覺 궁궁을을불각하니
白十勝 백십승을엇지알며
白十勝 백십승을不覺 불각하니
亞亞倣佛 불아중불엇지알며
亞亞倣佛 불아중불불각하니
鷄龍鄭氏 계룡정씨엇지알며
鷄龍鄭氏 不覺 계룡정씨불각하니
白石妙理 백석묘리엇지알며
白石妙理 不覺 백석묘리불각하니
穀種三豊 곡중삼풍엇지알며
穀種三豊 不覺 곡중삼풍불각하니
兩白聖人 양백성인엇지알며
兩白聖人 不覺 양백성인불각하니
儒佛仙승 유불선합엇지알며
儒佛仙승 不覺 유불선합불각하니
脫劫重生 탈겁중생엇지알며
脫劫重生 不覺 탈겁중생불각이면
鄭道守 정도령을알엇리라

수승화강의 이치를 깨닫지 못하고 석정곤(石井埵)을 어찌 알며 석정의(石井巖)을 모르고 사담칠두(寺聳七斗)를 어찌 알며

당신을 영생의 세계로 안내하는 신문

성금계좌 : 우체국 103747-02-134421 예금주 : 이승우
승리신문은 독자님들의 정성어린 성금으로 만들어집니다
전국 각지에서 성금을 보내주신 분께 감사드립니다

승리신문	1990.3.3 등록번호 다 - 0029
발행인 겸 편집인 김중만	
본지는 구세주(정도령, 미륵불)께서 말씀하신 사람됨이 실제로 죽지않는 원리(영생학)를 누구든지 쉽게 배우고 실천할 수 있도록 소개하여 질병과 죽음이 없는 개벽된 세상을 만들고 진정한 평화의 세계를 구현하는데 기여함을 목적으로 발행됩니다.	
경기도 부천시 소사구 안곡로 205번길 37 우 14679	광고 및 구독신청 전화 032) 343-9985 FAX 032) 349-0202
홈페이지 www.victor.or.kr	
본지는 신문윤리강령 및 그 실천요강을 준수합니다.	